

聞いて、考えて、行動に移す

篠塚康典[†] (広島県農業共済組合連合会山県家畜診療所係長・広島県獣医師会)

産業動物臨床に20年間携わってきた。今の私にとって20年分の経験は誇るべき貴重な財産であることに間違いはないが、中にはマイナスに働いてしまうものもある。それは確証バイアスである。確証バイアスとは、物事をみる際に自分に都合のいい情報のみを集めて自分の先入観を補強するという、いわゆる「思い込み」のことである。臨床経験を積むということは、診断における思い込み部分の増大を意味し、とりわけ成功体験の存在感は大きい。初診時は、すべての疾病の可能性を排除せず、真っ白な心で臨まなければならないとわかっているが、そのあたりが次第に難しくなっている。これは、経験に胡坐をかいている状態といってよいだろう。今の私には、自分の首根っこをつかまえて一歩下がらせ、落ち着いて全体像をとらえ直すしくみが必要なのだ。

診断における確証バイアスのリスクは減らさなければならない。そのためには、先入観を排除していろいろな角度から症例を検討し、総合的に判断することが必要である。そこで、己の恣意性を自覚するための手段は「しっかりと人の話を聞くこと」であると考え、実践しはじめたところだ。大学病院で医師をしている同級生と話するとき、私は聞かれる側の心地よさを感じることができ、彼が話し方(聞き方)のトレーニングをつんでいることを実感する。私にそのテクニックはないが、最近では稟告だけでなく、畜主の雑談などにも耳を傾け、時間をかけて患者を診るように心がけている。すると不思議なことに自分が幽体離脱することがある。数メートル上空から牛を挟んで私と畜主が話しているのを見ることができるようになるのだ。こうなったら先入観なく診断・治療ができるような気がして、積極的に幽体離脱?できるような心掛けているが、その効果はしばらく続けてみなければわからない。いずれにしても、「心で人の話を聞くこと」が重要であることに変わりなく、虚心坦懐、取り組んでいきたい。

高校の頃、古典(漢文)が苦手であった。まったく自信のなかったテストを返されたとき、おそろおそろ裏から透かして見たら「○」が見えた。やったー、正解があった!と思って点数を見たら0点の○だった。この経験

は、同じ事象でも見る方向によって解釈が異なることを示してくれた、我が人生における布石であった。

病気の診断に限らず、ものごとは複数の視点からとらえなければ本質を見逃してしまいがちであることは承知している。いろいろな角度から眺めたり、一歩下がって客観的に全体像を見ることが肝要だ。多角的な評価をすべて正確にすることなどできるとは思わないし、その必要もないだろうが、少なくともこのことを意識し、真摯に捉えようとする態度は必要だと思う。

産業動物診療行為全体を俯瞰してみよう。一頭の牛を治療している獣医師がいる。牛はすべてを委ね目には涙を浮かべている。獣医師は真剣に疾病と取り組み、診断を下して科学的根拠に基づいた治療を行っている。その背後には生産者と消費者の視線が熱く注がれている。獣医師は個体にばかり目を向けてしまいがちになるが、生産者は疾病による損害防止だけでなく生産性の向上を強く望んでいる。一方、消費者は安全な畜産物を期待して牛を見ている。それどころか、安全の先にある安心までも生産者に求めている。私見だが、「安全」は科学的根拠に基づいてデータなどで示すこと(生産者サイドで情報管理・発信)は可能だが、「安心」は完全に受け手である消費者の意識の問題で、生産者やその関係者のコントロールできる問題ではないと思っている。消費者の「安心」にはマスコミュニケーション学、群衆心理学などの知識を持った専門家によるマクロ戦略が必要ではないかと思うし、そのコストは最終受益者である消費者が負担すべきではないか、と考える。

篠塚康典

—略歴—

- 1992年 鹿児島大学卒業
- 同年 広島県三次保健所勤務
- 1993年 広島県農業共済組合連合会勤務
- 現在に至る
- 2009年 山口大学大学院連合獣医学研究科修了



[†] 連絡責任者：篠塚康典 (広島県農業共済組合連合会山県家畜診療所)

社会における産業動物臨床獣医師の位置づけに関して、これが今の私の理解である。このようなイメージを頭に描きながら、知識や経験によって自分の頭で考えることを放棄することなく、今後も産業動物診療に関わっていきたいと思う。

もっとしっかりと人の話を聞こう。先日臨時国会の冒頭で行われた野田総理の所信表明演説に必死に野次をとばす国会議員を見て、改めてそう思った。元来無口な私にはちょうど良い。妻も同感だそうだ。
